

## イヌイット民話「セドナ」における再話と原話の相違点について

曾根素子

### On the Differences of Retold and Original Editions of Inuit Folktale, *Sedna*

Motoko SONE

#### はじめに

北極圏のグリーンランドやカナダ北部に住むイヌイットは、厳しい自然のなかで彼ら独自の口承文学を生み出した。文字を持たないイヌイットは古くから伝わる彼らの民話や昔話、神話を子供や孫に口伝えで残してきた。

「イヌイット」は一般的には「エスキモー」と呼ばれる民族のことである。この「エスキモー」というのは、「インディアンの一つであるクリー族がつけた渾名で、『生肉を食う連中』という意味である」<sup>(1)</sup>。そのため彼らはこの呼称を嫌い、自らも「イヌイット」と呼び他の民族からも「イヌイット」と呼ばれることを望むのである。では、この「イヌイット」とはどのような意味であろうか。それは彼らのことばで「人間」を意味しているという。本多勝一氏は、「イヌイット以外の人間は人間ではない」という誇りの意味ではなく、動物に対する人間と解釈するほうが自然ではないかと述べている。<sup>(2)</sup>一方、宮岡伯人氏は、「エスキモーにとっては、おおくの民族にみられることだが、じぶんたちこそが『人間のなかの人間』なのであった」<sup>(3)</sup>と述べ、イヌイットを誇りたかき民とみなしている。

ところで、口承文学である彼らの民話や昔話などはどのように我々現代社会に伝わったのであろうか。グリーンランド生まれの Knud=Rasmussen や、デンマーク人の Birket=Smith など、探検家や人類学者が彼らの生活や文化の調査を行なった時に収集したといわれる。集められた民話や昔話は、いろいろな集落において、幾度にもわたって、さまざまなイヌイットが語ったものであり、また収集家もさまざまであるため、たとえ同じ物語であっても細かい点に及ぶと内容は必ずしも同じであるとは言えない場合が多い。また、再話された場合には再話者によって脚色された可能性もある。Sheila=Egoff は、児童文学においてのそうしたイヌイットの民話について、再話がヨーロッパ型になるのは避けられない<sup>(4)</sup>と述べている。つまり、収集された民話はすでにデンマーク語などに翻訳されており、我々はそれをまた、英語または日本語の翻訳で読むことになり、その過程で再話者の発想が介入してくる可能性もある。

さて、イヌイットの民話は厳しい環境の影響を受け、また、彼らの生活手段である狩猟——あざらしや鯨などの海獣やカリブーやきつねなどの動物——を題材にしたものが多いといわれる。「セドナ」はその海獣を生みだした海の女神の物語としてよく知られている。わたしは、ここで英語で再話された三つのタイプの「セドナ」物語をとりあげる。その三話を比較し、相違点について考えてみる。また、その三話のうちの二話が再話の際もとにしたという<sup>(5)</sup>

Franz=Boas の収集した「セドナ」とも比較して、その相違点について考えてみたい。

### I. 「セドナ」について

ここでとりあげるのは、*Sedna, the Sea Goddess*<sup>(6)</sup>、*The Sedna Legend*<sup>(7)</sup>、*Sedna, the Women Under the Sea*<sup>(8)</sup>の三つの話で、それぞれをA、B、Cとする。

これら三つの話に共通したあらすじはこうである。

セドナという美しい娘が、海岸沿いに父（または父と兄弟）と住んでいた。たくさんの男が彼女に結婚を申し込んだ。しかし、彼女は誰も気に入らなかった。ある日、遠くの国からハンサムな若者がやってきて、彼女に結婚を申しこんだ。彼は自分のところに嫁に来れば、「柔かい毛皮」、「油の満たされたランプ」、「肉」があり、飢えとは縁のない生活ができると言った。彼女はそのことばを信じてついていったが、実際はそうではなかった。そこで、娘は自分がだまされていたことに気付く。そんな彼女を父親や兄弟が連れ戻しにやって来た。そして、連れて帰る途中、彼らはセドナの夫に見つかった。海は彼に同情して、その復讐心で海は大荒れとなった。父親たちは自分の命を救うため、彼女を海へ投げ入れた。セドナは彼らの乗ったボートにしがみついたが、彼らは彼女の手を切り落とした。そんなことを二度、三度と繰り返し、セドナは海に沈んでいった。彼女の指は海獣あざらし、セイウチ、くじらに変わり、海の神となったセドナは、自分から生まれたこれらの動物を支配し、不猟、豊猟を決める。そのため、飢饉のような深刻な事態に陥った時には、スピリットを持ち、霊と人間との仲介をするまじない師が彼女のもとへ行き、手のなくなった彼女の髪をとかしてやり、彼らが海獣を捕獲できるようにそれら海獣を放ってくれるように頼むのである。

さて、こうしたあらすじでも、三つの話の構成要素に違いがあることがわかる。それでは、どのような違いがあるのか。三話ともまったく違う構成要素であったり、あるいは二話に同じ構成要素があることもある。それら構成要素とその違いを一覧表にまとめてみる。

DはFranz=Boasが収集した「セドナ」である。

状況	構成要素	A	B	C	D
結婚前	家族構成	セドナ, 父親, 兄弟	セドナ, 父親	セドナ, 父親	アヴィラヨック, 父親, 子供, 夫(石が変身した犬)
結婚後の生活	夫	ウミツバメ (人間に変身)	アビ (人間に変身)	フルマかもめ (人間に変身)	2人目 ウミツバメ (2人目は人間に変身)
	誘惑の歌・ことば 実際の生活 セドナの様子	豊かさ(毛皮, 油, 肉)の強調 豊かではない	豊かさ(毛皮, 油, 肉)の強調 豊かではない 助けを求めて叫ぶ	豊かさ(毛皮, 油, 肉)の強調 豊かではない 助けを求めて叫ぶ	
セドナの救出	父親・兄弟の対処	女手を必要として迎えに行く	一年後迎えに行く	一年後迎えに行く	大を残して迎えに行く
	夫の様子	不在	不在	父親に殺される	不在
	夫の対処(その後)	鳥の姿のままセドナたちを追う	人間に姿を変えセドナを探す	夫の兄弟たちがセドナを追う	人間に姿を変え妻たちを探す

イヌイット民話「セドナ」における再話と原話の相違点について

状況	構成要素	A	B	C	D
セドナの救出	夫の行動	翼をはばたかせ風をおこす	アビに姿を変え海へ突っ込む	魔法の力で凄まじい風を起こす	海面を飛んで船の上を旋回
	海の様子	風がうなり波が高く盛り上がる	波がうねる	波は船をもちあげるほど高くなる	突然波がたち、水かさが増し、強風が荒れ狂う
セドナと父親たちとの攻防	父親・兄弟の対処	自分たちが助かるためセドナを海へ投げ入れた	自分が助かるためセドナを海へ突き落とした	自分が助かるためセドナを海へ突き落とした	夫の復讐を恐れてセドナを海へ投げ入れた
	セドナの対処	ボートのへりにつかまる	カヤックのへりにつかまる	ボートのへりにつかまる	船の縁をつかむ
	父親・兄弟の対処	セドナの指先をたたき落とす	セドナの手を刺す	セドナの指先を斬る	娘の第一関節を斬り落とす
	道具	櫂	ナイフ	ナイフ	斧
	セドナの対処	海から上がってへりにつかまる	海から上がってへりにつかまる	海から上がってへりにつかまる	船にしがみついている
父親・兄弟の対処	第二関節, 第三関節, 親指をたたき落とす(折れて落ちる)	二度, 刺す	指の真ん中を斬る	第二, 第三関節を斬り落とす櫂で左目をたたきだす	
海獣の誕生	指先の行方	第一関節→あざらし 第二→地あざらし 第三→セイウチ 親指→くじら	一度目→2頭のあざらし 二度目→セイウチ 三度目→くじら	第一関節→くじら 第二→あざらし	第一関節→くじら 爪→ひげ 第二→あざらし 第三→別種のあざらし
	セドナの最後	海へ沈んだ	海へ沈み海獣たちが後を追った	父親にボートに引き上げられた	仰向けに海に落ちた
セドナと父親たちの末路	父親・兄弟の対処	やっと岸へ着いたが、高波におそわれおぼれた	イグルーで深い眠りについた	テントで眠りについた	陸についた干潮をみはからって渚に身を横たえた
	犬		セドナの愛犬	セドナの愛犬 セドナの命令で、父親の手足を噛み斬る	前夫であった犬 父親によって、重しを持たされ海に沈む
	父親・兄弟の末路		セドナの命令で、海獣によって犬と共にセドナの元へ海の地で暮らす	大地が裂け、父親・犬たちは Adlivun の国へ落ちた	満潮がおおい老人は海へ 下界の娘の家でテントをかぶって横になっている
セドナの末路	海獣を管理している	父親, 犬と海の地で暮らす 海獣に命令を与える	地と海の下の Adlivun で父親, 犬たちと暮らす 海獣に命令を与える	アヴィラヨックからセドナへ変わる 下界の石とくじらの骨の家に住む 目はひとつ, 歩くことができない	
現在	現在の信仰	飢饉の場合にまじない師が、彼女の髪を編んであげると、豊猟になる	まじない師の霊が彼女の髪をといてあげると、海獣を放ってくれる	まじない師が彼女のもつれた髪をといてやると、海獣を放ってくれる	

上の表から、ここではA、B、Cの三話における特徴的な相違について考察し、その違いが何に因るのか考察してみる。まず第一に登場人物である。第二に、セドナを海へ落とすときの方法である。第三に、海獣の生まれる順序である。

## Ⅱ. 登場人物についての相違点

まず、第一の登場人物についてみれば、セドナの家族構成とその夫の素性が違っていることである。彼女の夫はいずれの場合も海鳥である。ということは、イヌイットが身近な動物を民話の題材にしていることから、海岸に住んでいたイヌイットに伝承されてきた民話と考えられる。しかし、この鳥の種類はAの話ではウミツバメ、Bの話ではアビ、Cの話ではフルマかもめというように違っている。この違いは何に因るのであろうか。先ほどこの話の出所を海岸と考えたが、もし、まったく同じ海岸地域で語られていたとしたら、イヌイットの集落は数家族で一つであるからこのような違いは生じないであろう。こう考えると、これらは三話とも海岸沿ではあるが違う地域の集落で伝承されていた可能性がある。

また、このらの民話にはそれぞれの鳥の特性がいかされている。たとえば、Aの話ではウミツバメについて次のように描写している：

The Petrels, proud birds that they are, live on the highest parts of the cliffs. From their peaks they swirl out like snowflakes, looking down on the rolling noisiness of Razor Bills who build their nests halfway up, and the Gulls and the little Kit-tiwakes who are content to nest at the bottom.

Once, long, long ago, there was a Petrel who was so proud that he could find no mate that pleased him among his own kind, so he decided that he would marry a human being<sup>(9)</sup>

セドナの夫となるそのウミツバメが、自分の種族には自分を満足させられるような花嫁はいないと思うほど誇り高いことを、ウミツバメという鳥が実際に崖の一番高いところに巣を作り、下に巣を作るほかの鳥たちを見下ろしているようにみえることに対比させて強調している。またウミツバメのなかに「Stormy Petrel (ヒメウミツバメ)」という種類があるが、この鳥は嵐のまえぶれを察知することができると言われていて、この民話の中でもウミツバメは翼をはばたかせて嵐を引き起こしている。そして、Bの話でセドナの夫となるアビは、海に潜る鳥として知られている。そのため、Aの話のような嵐を引き起こすのではなく、アビが海のなかへ突っ込んでいくと、海の精霊が彼に同情し、セドナに対する怒りによって大荒れになるのである。

先にも述べたように、イヌイットの民話に海獣の話が多いのは、彼らの生活においてもっとも身近なものであり、彼らの生命を支配していたからと言っても過言ではないからである。つまり、彼らの生活必需品はほとんどあざらしやくじらなどの海獣かカリブーから作られているのである。肉や内蔵が食糧になるのはもちろんのこと、毛皮は衣服や装身具に、骨、牙、角は狩りの道具、脂肪は油に変わる。それ故彼らは、動物たちを身近に感じ、親しみをもち、また彼らと如何に上手く共存していくかを考えているのである。そして、彼らは周囲の動物たちを観察し、その生態を理解して自然に適應しているのである。

次に家族構成の違いについてであるが、表からもわかるようにセドナは父親と二人暮らしであ

るか、父親と大勢の兄弟と暮らしている。これは、この地球上でもっとも苛酷な生活条件の中に暮らすイヌイットの生活をよく反映させている。まず、それら三つのどの話にも母親が登場しないのは、イヌイットの社会での男女の人口のアンバランスが考えられる。つまり、こうした厳しい自然環境のもとでは、生活が可能な限られた土地に、その土地が養うことのできる最低限の人口しか受け入れられない。その中でまず標的になるのは、女の子の嬰兒であった。人口増加をおさえるために（とくに女兒が多かったが）ふつう出産直後に息をとめてしまう嬰兒殺しとかは、異文化のものにはどのように映ろうとも、おかれた環境にたいして社会的にたくみな適応をはたした例にちがいない。<sup>(10)</sup> 将来狩猟の助けにもならないばかりでなく、獲った食糧を消費してしまう女の子を、余裕もないのに育てることは、運にまかせた狩猟にその食糧調達を依存しているイヌイットにとっては不合理なことと考えるのはやむを得ないことであろう。こうして女が足りなくなると、一妻多夫制をとり入れていたようである。この話に母親がないのも、この慣習がこの民話が語られた時にあったことを表していると思われる。兄弟が多くて、姉妹がないのもこれによっている。

### Ⅲ. セドナの殺し方における相違点

第二のセドナを海へ落とすときの方法についてであるが、ここには先ほどの地域性の違いはなく、文明の介入がその落とし方の違いに大きく影響していると思われる。その文明の介入とはヨーロッパ人との接触である。Birket=Smithによれば、1600年代前半に、それまでの大航海時代に活躍していたスペイン人、ポルトガル人に代わってゲルマン民族、特に英国人によって積極的に北西の航路発見の努力がされ始めた。これがNorthwest Passageの発見で、これに伴い、イヌイットの獲る毛皮を目当てに国策会社が設立されて、ヨーロッパ人とイヌイットの接触は多くなった。<sup>(11)</sup> これにより、今まで彼らの生活にはなかったさまざまなものが入ってきた。セドナの指を切り落とすナイフもその時持ち込まれたものではないだろうか。

Sheila=Egoffは、ヨーロッパの影響について次のように述べている：

Like much Indian folklore, their tales have an underlying earthiness that is smoothed out or omitted by the retellers for children. It is perhaps inevitable that retellings are cast in the European mould, with a strong and decisive plot line.<sup>(12)</sup>

Bの話はナイフを使用してもセドナの指は切り落とさないもので、AとCの話のように残酷に見える描写に比べるとかなりやわらげた描写になっている。このように露骨な血なまぐさい描写をやわらげたり、省いたりする傾向にある。では、なぜもう一つのごく最近出版されたCの話では、セドナの指は切り落とされたのか。同じ著書の中で、彼女はまた次のように述べている：

In general, Inuit stories lack the European tale's strong delineation of what is good and what is evil; a moral tone, however, might have been imposed by later generations in the stories' long cultural transmission.<sup>(13)</sup>

つまり、父親の取った行動が如何に極悪非道であることを強調するためにこのような描写に再話

されたのではないかと考えられる。文字を持たないイヌイットの民話を文字に翻訳したのはヨーロッパ人で、再話する場合に、イヌイット特有の話の構成を彼らヨーロッパ人に合ったものに変えてしまったという可能性も十分考えられる。これがイヌイットの民話が多様に展開してきた一因に思える。

#### Ⅳ. 海獣誕生における相違点

第三の海獣の誕生する順序についてであるが、この違いはその海獣の持つ役割の重要性の違いではないだろうか。つまり、海獣の捕獲を生活の基盤にしている彼らにとって、それら海獣は彼らの生命を支えるものであるため、彼らが必要とするものを第一に誕生させているのではないかということである。

表からもわかるが、Aの話では、第一関節があざらしに、第二関節がojuk（英訳ではground seal）に、第三関節がセイウチに、そして親指がくじらに変わった。Bの話では関節が斬り落とされるわけではなかったので、ナイフで刺された彼女の手から流れてた血が海のなかで固まって違った形を作り出すのである。一度目に刺されたとき流れた血から2頭のあざらしが生まれ、二度目に刺された時には、流れてた血で真っ赤になった海からセイウチが生まれ、三度目にはくじらが生まれた。Cの話では、第一関節がくじらになり、第二関節があざらしへ変わった。

A、Bの話では最初が変わったものはあざらしである。イヌイットにとってのあざらしについて蒲生正男氏は次のように述べている：

あざらしの肉は味も悪くカリブーの肉ほど価値を持たなかったが、その皮と脂肪は、極寒の地に生きる海岸エスキモーの物質文化の中心を果たしてきた。皮は、夏の狩猟、交易の旅に欠かせぬカヤック（一人乗りの皮船）やウミヤック（大型の皮船）、あるいは雪上を歩くのに必要な靴を作るのに用いられた。脂肪は燈火としたり、料理用、暖房用の燃料として、利用してきた。<sup>(14)</sup>

木のまったく生えないこの地では、食糧の確保もさることながら燃料の確保も彼らの生死を決める問題である。その意味であざらしは海獣類のなかでも特に彼らと密接な結びつきがあるのである。それ故、彼らはこの民話の中で、最初にあざらしを誕生させ、その母であるセドナを海の女神にしたあげたのではないだろうか。

では、Cの話でくじらが第一関節から生まれたのはなぜか。イヌイットにとってくじらがあざらし同様、彼らの生活を支える利用価値の高い獲物である。ただ、利用価値は高いけれども巨大であるために、大変多くの人手を必要とし、また、まったくとれない季節もあるということで、安定した食糧あるいは資源とはなりえなかった。しかし、捕獲できたときにはこのうえもない喜びであると想像されるから、その喜びをもたらしてくれるセドナに感謝し、また、その喜びを幾度ももたらしてくれるようにという願いをこめて、海獣たちを支配しているセドナから最初に生まれたものをくじらとしたのかもしれない。

## V. 原話とそのほかの三話との相違点

ここで原話としてとりあげたのは、Franz=Baos が1901年に出版した *The Eskimo of Baffin Land and Hudson Bay* に収められている話である。一覧表にもあげているが、この話と前述の三話との大きな違いは話の前半部分である。

パドゥリ（バフィン・ランド）の村にアヴィラヨックという、結婚しながらない娘がすんでいた。村には白と赤の斑点のある石があったが、その石が犬に姿をかえ、この娘と結婚した。娘はたくさんの子供をうみ、エスキモーや白人とかがった人種になった子供たちがたいへん騒がしかったのでアヴィラヨックの父は煩がり、その家族をむかひの島に移してしまった。毎日アヴィラヨックは、じぶんと子供たちが食べる肉をもらいに夫を父親の小屋へ行かせた。夫は紐で結わえた靴を首にかけてもらい、その靴に老人がいれてくれた肉を持ってかえってくるのであった。<sup>(15)</sup>

まず、このDの話における家族構成をみると、母親がいないことは共通しているけれども、娘は、ウミツバメと結婚する前にすでに犬と結婚している。この夫は、石が人間ではなく犬に姿をかえたものである。イヌイットの民話には動物（いもむしなども含む）と結婚する話が少なくない。イヌイットの信仰に「イヌア（Inua）」というものがあって、宮岡伯人氏によれば、「『イヌア（Inua）』というものは、エスキモーの信じるところによれば、生物はもとより、（丘、流木といった）無生物にも、（天候、風、月といった）自然現象にも、（さらに地方によっては、睡眠とか食物といった概念にも）存在する一種の霊であり、いずれも概して人間に似た姿をしている。」<sup>(16)</sup>らしい。結婚しながらなかった娘がどうして犬と結婚することになったのか、一見突拍子もないことのようにあるが、この「イヌア」の信仰を考えると、彼女にはこの犬の「イヌア」が人間に似た姿をして現われたとしても不思議ではない。

子供たちはさまざまな人種で生まれてきている。犬との混血であるから犬が混じっていても不思議ではないのに、人間のなかの違う種族の子供たちが生まれた。これは、イヌイットが、動物にも人間同様魂があると信じてはいるけれども、動物界から人間を区別している誇り高さを持っているため、その子供は動物にはならないで、人間として生まれるのであろう。

また、娘の名前は「アヴィラヨック」で、この娘はいけにえとして父親に海へ投げ入れられて沈んでいった後、下界に行き初めてセドナになるのである。ほかの三話では、初めから娘の名は「セドナ」で、「セドナ」のまま海に沈み、「セドナ」という女神になった。

このようにこの原話の前半部分は、こうした彼ら独特の信仰や、あるいは動物や自然に対する態度など彼らにしか理解できないような内容で、ここに説明的な話の展開がなければその話を理解できない者、つまり、ヨーロッパ人などの再話者にとっては邪魔な部分となり、後に「セドナ」となるのであるから、最初からその名前であったかのようにこの前半部分を省いて再話したと考えられる。この点が、原話と再話の大きな違いとなっている。

## おわりに

民話は、ある民族が自分たちの生活のなかから創りだしたもので、彼らの生きてきた環境、状況、信仰、文化の影響を大きくうけている。「セドナ」もイヌイットの生活や彼らの知恵、

そして、イヌイットの世界観をその根源にもっている。

彼らの生活の基盤は自然の恵みへの依存である。自然との共存を拒み、自然を敬っていかなければ死を覚悟しなくてはならない。文明が彼らの生活に介入している現在では、自然を切り離しても、彼らの生活は成り立っていくのかもしれない。しかし、現在ほど文明社会につかっていた時代から、「セドナ」がいつごろから語られ始めたのかわからないが、多分西洋人と出会う前から語られていたと思われるが)、その時代には彼らの生活は自然に逆らっては成りたたなかった。どんな手段をとっても生き延びていかなければならなかったのである。嬰兒、特に女の嬰兒を殺してしまうのは、成長してから獵の助けにならないばかりでなく、その貴重な食糧を減らしてしまう女の子が、彼らにとっては邪魔な存在であったと考えられる。これはこの生活体系では当然のことと考えるべきである。「セドナ」の父親たちにもその考え方がよく表れているし、物語の家族構成にもそれが反映されている。また、その自然のなかに彼らは超自然な世界を見だし、自然と超自然、そして彼ら人間の社会を一つに考え、自然を左右する超自然の「イヌア」「スピリット」に上手く対処することで自分たちの生活を支えていた。「海の神」「鳥の精霊」の怒りを、「セドナ」によっておさめる。こうして、次の時代へ命をつないでいくのである。これが、彼ら独自の信仰でありこの民話の根源である。

イヌイットの民話の中には残酷なものが多いと言われている。「セドナ」の物語もその一つとされている。しかし、その残酷性は彼らのこうした生活環境や信仰のなかでは当然のことと思われる。その日一日を生きることが当然のように与えられている環境に住む者とは違い、その日一日を生きぬくことが最大の目標であるイヌイットにとっては、自然なことである。A, B, Cの三話ともに、その最後のしめくくりとして「セドナ」へのとりなしが語られている。海獣が取れなくなって、彼らの集落に飢饉が訪れたとき、精霊と人間との仲介をする不思議な力を持ったシャーマンが海獣たちを思い通りに操っている「セドナ」のご機嫌をとり、それら海獣を送り出してくれるように頼むのである。すると、飢饉からまぬがれるというのである。これは、この民話が再話された時に付け加えられたものであろう。なぜなら、この民話の原話としてとりあげたDの話にはこの箇所はない。つまり、イヌイットの「セドナ」への信仰心を強調するために付け加えられたと考えられる。そして、原話にその箇所がないのは、イヌイット自身にはそれがよくわかっているからである。「超自然の力」を敬うことは、彼らの常識であるからである。このように、イヌイットの民話は「自然」と「超自然」、そして、「人間」の在り方をその中に秘めているのではないだろうか。

## 註

- (1) 本多勝一著 『カナダ・エスキモー』(朝日文庫, 1981) p 19
- (2) 同上 p 58
- (3) 宮岡伯人著 『エスキモー 極北の文化誌』(岩波新書, 1987) p 53
- (4) Sheila=Egoff and Judith=Saltman, *The New Republic of Childhood* (Toronto Oxford Univ Press, 1990)
- (5) Ibid, p 209
- (6) 桂宥子 廉岡糸子編 『英米文学双書 4 The Faber Book of North American legends』(中部日本教育文化会, 1987) pp. 1-7  
出典: Helen=R Caswell, *Shadows from the Singing House* (Rutland, Vermont Charles Tuttle, 1968)



イヌイット民話「セドナ」における再話と原話の相違点について

- (7) Retold by Ronald Melzack, *The Day Tuk Became a Hunter & Other Eskimo Stories* (Toronto: McClelland & Stewart Limited, 1967) pp. 27–34
- (8) Told by Joseph Bruchac, *The Native Stories from Keepers of the Earth* (Saskatoon: Fifth House Publishers, 1991) pp. 67–71
- (9) 桂宥子 廉岡糸子編, p. 1
- (10) 宮岡伯人著, p. 49
- (11) Birket-Smith, *Eskimos* (New York: Crown Publishers, Inc., 1971) p. 16
- (12) Sheila Egoff & Judith Saltman, p. 208
- (13) Ibid. p. 209
- (14) 祖父江孝男編 蒲生正男著 「極北の狩猟民アラスカ・エスキモー」『民族探険の旅 第7集』(学習研究社, 1977)
- (15) 宮岡伯人著, p. 88
- (16) 同上, p. 44